

<原著論文>

運動生活の成立条件に関する再検討 －運動生活者による意味づけの視角から－

常 浦 光 希¹⁾・高 岡 敦 史²⁾

Research on reconsideration of the establishment conditions of sport life
－ From the viewing angle of meaning by local residents －
Kouki TSUNEURA¹ Atsushi TAKAOKA²

Abstract

The purpose of this study was to understand the mechanism to occur the participant behavior against obstructive conditions and facilitative conditions that an opportunity sport life has changed in the "turning point". And it was to understand the relationship between the conditions from the perspective of the local residents. The survey was repeated a semi-structured interview in three subjects.

As a result, the obstructive conditions and facilitative conditions (independent conditions, social conditions, management conditions) of involvement with sport, is intended to overlap in the sense of the local residents, at least three structure is revealed. A) Structure in which facilitative conditions is transcended by the obstructive conditions, B) Structure in which obstructive condition is transcended by facilitative conditions. C) Structure that creates promote the other facilitative conditions.

The following three findings were obtained from the results of the analysis:

- 1) The obstructive conditions and facilitative conditions of involvement with sport, are in a relationship that are overlapping, or antagonistic relationship.
- 2) Social conditions and independent conditions are strongly influenced establishment as involvement with sport, sometimes management conditions as obstructive condition is canceled by the independent conditions as facilitative conditions.
- 3) When the facilitative conditions are maintained as the foundation, urge to mean sports environments on the local living environments by desire to sports.

In the future, we should re-capture the promotion conditions and obstructive condition from the perspective of the local residents. It would be by that, such as converting the meaning of the local residents, a new regional sports promotion is possible.

キーワード：運動生活 ライフストーリー 促進条件 抵抗条件

Keywords : sport life, life story, facilitative conditions, obstructive conditions

1) 岡山県高梁市立宇治高等学校
〒719-2232

岡山県高梁市宇治町宇治1686

2) 岡山大学教育学研究科
〒700-8530

岡山県岡山市北区津島中3-1-1

1) Okayama Takahashi Municipal Uji High School

1686 Uji Ujicho Takahashi city, Okayama 719-2232

2) Graduate School of Education Lecture, Okayama University

3-1-1 Tsushimanaka, Kita-ku, Okayama 700-8530

I. 問題認識と目的

生涯にわたって運動・スポーツと関わることのできる環境を整備することはスポーツ経営の要諦である。これまでのスポーツ経営学においては、「消費者や運動者としての人々は経営体の環境要因として取り扱われる傾向」（清水，1997，p9）があり，そのことへの内省を経て「スポーツ生活の立場からどのような経営体や事業の存続・発展が必要なかを考究することも実践理論科学としてのスポーツ経営学の課題」（清水，2001，p14）であるという認識に到達している。またスポーツ実践現場においては，施設整備や指導者養成，教室・大会開催といったスポーツ環境整備を中心とした上からのスポーツ政策から，総合型地域スポーツクラブの創設・育成という行政と地域住民が一体となって取り組む社会運動的な活動が推進されるようになってきた（八代，2002）。

運動・スポーツとの関わりは，する，みる，支えるといった関わり方の拡がりや運動・スポーツ実践の主体である地域住民の価値観や生活スタイルの多様化など，複雑化している状況にある。運動生活は生活者の志向性が複雑に絡み合っているものであるにも関わらず^{注1}（後藤，2010），これまでの地域スポーツ経営論は，総合型地域スポーツクラブに期待される諸価値に照らしてクラブの育成や経営のあり方を論じてきた。そのことについて柳沢（2006）は，組織単体の分析を主眼に置いただけでは，地域に住む生活者が創りだした地域性とスポーツが生み出す地域性との関連が看過される危険があると指摘している。この2つの地域性に関連して，関根ほか（2009）は，地域の人びとが総合型地域スポーツクラブ設立という新たな生活条件に対応する過程と，地域組織の活動展開を記述した。関根らに確認される地域スポーツ経営研究の新たな潮流は，スポーツ組織の分析を主眼に置いてきた体育・スポーツ経営学にとって，運動・スポーツと生活とを関連付けた視点が後景化しており，地域で暮らす生活者の内実を浮かび上がらせるには至っていないという課題認識

を持っている。また，地域社会から影響を受けた運動生活者の主観的意味の解明なしに，地域におけるスポーツ実践を正確に把握することはできないことから，一人ひとりの生活者の立場から，経営体や事業展開を検討する視点が必要だと主張している。

スポーツ実践現場の個性や個別性の理解のあり方について，清水（2007）は「社会現象を営む主体の側の意味付与の仕方や相互にどのように解釈しあっているかという対象の側の主体的意味を捉えることにある」（清水，2007，p8）と述べている。この認識論的立場に立脚すれば，運動生活は，生活者の運動・スポーツや地域生活に関する多様な意味を内包した諸行為によって成立していると捉えられる。そして，多様で複雑な状況としての運動生活を理解するためには，生活者の言葉を聞き取り，彼／彼女らの主体的意味を解釈することが不可欠となる。本研究が理解しようとするのは，生活者が意味づけている運動生活であり，生活者によって意味付与された，運動・スポーツへの接近・移動としての運動者行動，あるいは逃避・離脱行動としての運動者行動が生起する条件であり，運動生活の成立条件である。

これまで，運動者行動の抵抗条件としての主体的条件と社会的条件は，スポーツ経営が取り除くことの困難な抵抗条件と考えられてきた（八代・中村，2002）。運動者行動を生起させる条件については，70～80年代にかけて，学校や地域社会における体育・スポーツ事業との関連から捉えられてきた。永田（1969）は，宇土の「運動生活の階層化」という概念に基づき，運動者行動の階層構造がどのような主体的条件によって，どのように支えられているのかを明らかにしようとした。その結果，C階層>P階層>A階層>S階層という運動者行動の階層構造は，いくつかの主体的条件によって強く支えられていることが実証された。しかし，運動に対する欲求を強く持っていないながらS階層である者が抽出されたことから，主体的条件だけでは運動者行動の改善は叶わないと指摘している。これを踏まえ，永田（1970,1971,1972）は，環境

的條件（クラブサービス、プログラムサービス、エリアサービス）と体育事業との関係について検討し、体育現象が生起するためには主体的条件と環境的条件が必要であると結論づけている。さらに永田（1973）は、同一運動者の同時期における異なる経営体の影響を明らかにしようとした。この研究では、運動の成立・維持に必要な社会的条件が及ぼしている影響以上に、学校における運動生活の影響が大きいことが明らかにされた。一連の永田の研究は、学校体育経営の立場から、運動者の階層構造を体育事業と結びつけ、各条件との関係について捉えたものであった。高島（1970,1972,1974）は、学校を中心に行われてきた運動生活調査をもとにして、職場や地域社会に調査対象を拡げて運動生活を検討し、職場や地域社会における運動生活が、運動欲求や必要感から学校における運動生活と大きく異なることを明らかにした。八代ほか（1981,1983）は、運動者行動と経済的条件との関連について、運動者のスポーツ支出の程度と運動欲求は強く関与しているものの、同じサービスでも価格を先に意識するか、効用を意識するかは、運動者によって異なりをみせると報告している。その後、クラブサービス（岡本、1977；山下・多田、1982）、エリアサービス（永田ほか、1986）、プログラムサービス（築瀬ほか、1988；永田ほか、1989）について、その有効性に着目して成立条件との関連性が検討されてきており、その後の研究の方向性はスポーツサービスの各論へと展開を見せた。

一方で、運動者行動を決定づける促進条件や抵抗条件を理解しようとした研究は、吉澤（1982）によるスポーツエリアにおける主体的条件と環境条件の関連を検討した研究や、畑ほか（1984）による主体的条件の類型化を試みた研究が確認されるが、運動者行動がどのような条件下で生起するのかということ（運動者行動の生起条件）を運動生活者の意味世界から理解しようとした研究は管見の限りない。複雑化している運動生活を、外部の視点から理解しきることは困難であり、運動生活者の意味づけから理解しようとするアプローチはすでに提起され

ている。しかし、体育・スポーツ経営がその成立を企図する運動者行動の成立条件の再検討はいまだ着手されていない。

運動者行動は、運動・スポーツからの逃避・離脱行動としての運動者行動につながるものと、運動・スポーツへの接近・移動行動としての運動者行動につながるものに識別される。これまで、前者の逃避・離脱行動を生起させる抵抗条件は、下位カテゴリーとして主体的条件、社会的条件、経営的条件が認識され、経営的営みによって経営的条件が克服されなければならないと考えられてきた。

しかし、先にレビューした通り、運動者行動の生起条件に関する研究は、運動生活者が運動・スポーツに接近する条件も対象としてきた。

そこでは概念として示されていないものの、接近・移動行動としての運動行動を生起させる促進的な要因が認識されていた。本研究では、後者の運動・スポーツへの接近・移動行動を生起させる条件を促進条件として取り上げ、促進条件の下位カテゴリーとして主体的条件、社会的条件、経営的条件を認識する。

抵抗条件だけでなく促進条件も加え、しかもそれぞれの下位カテゴリーを認識するのは、運動者行動の生起と運動生活の成立のメカニズムを詳細に理解したいからに他ならない。運動者行動の生起条件のリストアップは先行研究によって行われたが、本研究は、運動生活者の生活文脈からスポーツ事業のあり方を再考することをねらいとしている。そのために、運動生活者の意味世界における運動生活のあり様と運動生活の変容をもたらす促進条件としての、あるいは抵抗条件としての主体的条件、社会的条件、経営的条件の関係性を明らかにすることを研究の目的とした。

II. 方法

1. 研究方法の検討

運動生活の変容をもたらした運動者行動の促進条件・抵抗条件を理解するためには、運動生

活者の運動生活の文脈に寄り添わなければならない。

そのための分析手法としてはライフストーリーとライフヒストリーが挙げられるだろう。これらは、社会学の領域で発展し、心理学、教育学、人類学、歴史学などの様々な学問領域で広く用いられている。ライフストーリーは、個人の人生に焦点を合わせ、その人自身の経験をもとにした語りから得た人生の物語である。ただ、人は自分の人生を最初から最後まで完全に語ることはできないという認識に立ち、語りはインタビューによって引き出されたものと理解される（桜井・小林，2005；山田，2005；桜井，2012）。一方、ライフヒストリーは人生の記録、あるいは個人の生活の過去から現在にいたる生活史であり、口述史、自伝、伝記、日記などの資料を用いて、個人の歴史を再構築したものである。ライフヒストリーは、語りを重要な資料としているという点で、ライフストーリーと同様であるが、研究者が当人から得た主体的な語りと社会史を照合し、時系列的に再構成し直したものである（中野・桜井，1995；有末，2012）。これまで、ライフヒストリーを構成する上での一つのデータとしてライフストーリーが位置付けられていた。再構成されたライフヒストリーと、その素材としてのライフストーリーという2つの関係から、2つの用語は区別されてきた（米山・小林，1993）。これに対し、桜井（2012）は、両者の違いを聞き手の位置づけにあるとしている。桜井によれば、ライフストーリーという個人の語りは、時代や地域性を超えた様々な出来事とそこに含まれる要素を伝達・伝承するために必要なコミュニケーションにおいて中心的な役割を果たしており、ストーリーが語られるには、語り手だけではなく聞き手が必要である。インタビュー調査を通して収集した語りは、聞き手としての研究者によって、語り手のみの語りへと編集し直され、ライフヒストリーとして構成される。ライフストーリーは語り手と聞き手の相互行為を通して構築されるという対話的構築主義アプローチ^{註2}にもとづくものであると捉える必要がある。また桜井

は、語られた内容が事実どうかは問題ではなく、現実には語り手によって構築されるものであると述べている。ライフストーリーを語ることは自分の経験に意味を与えることであり、語り手は過去の経験について「当人の所属するローカル文化に固有な用語や日常の特有な言い回しを利用して、ローカル・コミュニティの成員に説得的に自分の世界を語ろうとする」（桜井，2012，p95）。語り手は、当人をとりまく社会の中で過去の経験を語るのである。

すなわち、研究者（筆者）は運動生活者との対話を通してライフストーリーを引き出し、そこから彼／彼女らが意味づけている運動生活のあり様と、その変容期に浮上した運動者行動の促進条件あるいは抵抗条件としての主体的条件、社会的条件、経営的条件を理解することができるのである。よって本研究は、桜井の対話的構築主義アプローチに依拠してライフストーリーを収集・分析することとした。

2. ライフストーリーの構成方法

ライフストーリーを構成するうえで、「ライフストーリーの分析には何が語られたかという語りの内容とともに、どのように語られたかという語りの過程の分析」（桜井，2012，p79）が必要となる。過去の出来事を語ることは、過去の出来事の全てを詳細に明らかにすることではなく、その人の中で、何が、どのように、どういったこととして、ということが、個人の中にどのように存在し、どう変化しているのか、どのように捉えられ、実際に行動へと移っているのかを明らかにすることだからである（桜井，2012）。また、過去の出来事を膨大な言葉で語ってもらっても、過去の経験すべてを語りつくすことはできず、よって研究者として把握し切ることにはできない。ライフストーリーの語りは語り手の固有の時間秩序によって語られるものであるため、語りを語り手と聞き手の共同作業によって時系列に並び替えて整理する必要がある（中野・桜井，1995）。また、聞き取られたライフストーリーは、当人が過去をぼんやりと思いつくものとは異なり、聞き手に過去を語ろうと

する中で内省的に振り返った事柄である。よって内容や時間的前後の誤認といった間違いが生じる可能性がある。そのため、ライフストーリーを構成する際には、語り手との相互確認を通して丁寧に把握していく必要がある。そこで本研究では、詳細なライフストーリーを構成するために、ある程度の時間を空けて複数回にわたってインタビューを行い、その都度、書き起こした語りとそれを時系列的に編集したものを語り手に示して確認作業を繰り返し、最終的に完成したものをライフストーリーとして分析の俎上にのせた。

3. 対象事例の概要

半構造化インタビューを用いて、複数回にわたって人々のライフストーリーを聞きとり、そ

れをもとに分析を行った。調査対象は、同一市で生まれ育ち、現在も生活し続けている3名(男性2名、女性1名)である。いずれも50歳前後でありライフストーリーを聞き取るのに十分な年齢である。転機を捉えるために、これまでに少なくとも1度は、一定期間の運動・スポーツ実施経験のある者とした。50年前後のライフストーリーを聞き取るため、細かなサンプリングを設定せず、一人ひとりの人生そのものを詳細に捉えていくことを第一とし、本研究にて選定した3名のライフストーリーを個々に分析している。なお、地域性の違いに伴う運動生活の多様性を縮減するために同一市内からサンプリングした。

表1 調査対象者

対象者	年齢	性別	インタビュー	
			回数	総時間
事例1	54歳	男性	3回	2時間27分09秒
事例2	52歳	女性	3回	3時間13分08秒
事例3	49歳	男性	3回	3時間43分12秒

4. データの収集と分析の手順

調査は2012年12月から2013年6月に実施した。インタビューは、対象者に運動・スポーツとの関わりについて回顧しながら自由に語ってもらった。インタビューは3回に分けて行った。1回目に収集した語りを時系列に並び換えたトランスクリプト・シートを作成し、2回目以降のインタビューの際に、シートを対象者に示しながらライフストーリーの確認を行い、さらに語りを引き出した。また、3度のインタビューの度に、運動生活の転機における運動者行動の促進条件や抵抗条件について対象者と調査者との対話によって言語化・明示化することで、運動者行動の生起をめぐるライフストーリーに促

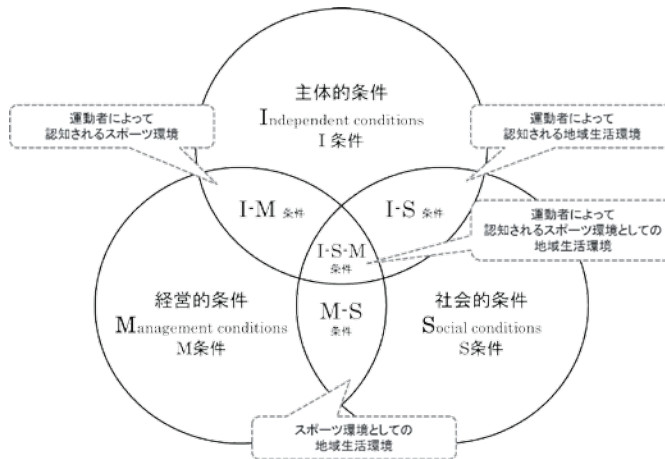
進条件・抵抗条件を浮かび上がらせた。その後、語りに依拠しながら、促進条件と抵抗条件を、さらに主体的条件・社会的条件・経営的条件に分類した。なお、本研究において、転機とは、当事者の意味づけの中で、運動生活が実施 - 非実施/非実施 - 実施といううつろい(接近、移動、逃避、離脱という運動者行動が生起した期間)を指している。運動者行動が生起した流れを3回にわたるインタビューにて確認を行うことで、事例ごとに転機を選定した。本研究では、ライフストーリーという当事者の人生を聞き取っている。事例によっては、運動生活が実施 - 実施 - 非実施という、これまでと何かしらの現状変化があったものの実施継続しており、

のちに逃避、離脱となったような運動生活の状況がみられる。このような運動生活における転機を把握するためには、一定期間の運動生活を把握しなければ理解することが出来ないと考える。紙数の制約上、すべての運動生活について言及することができないため、分析範囲を転機とその転機に関わる前後の期間とし、運動生活における転機を捉えることとした。

5. 各条件の操作的定義

各条件の分類に際しては、主体的条件、社会的条件、経営的条件の操作的定義が必要になる。図1に示した通り、主体的条件（I条件）、社会的条件（S条件）、経営的条件（M条件）は、論理的には相互重複している。

図1 主体的条件、社会的条件、経営的条件の重複関係



スポーツ経営体によって整備されたスポーツの場や社会状況は、事実としてそこにあるものだけでなく、運動生活者によって認知され、意味づけられてはじめて運動者行動を生起させる条件になりうるものもある。たとえば、整備されたスポーツ施設は運動生活者自身が利用可能で利用したいものと意味づけられていなければならない（I-M条件）。また、「歳を取ったらチームから引退した方がいい」といった行為規範は社会的に構成されたものであると同時に、運動生活者が構成し受容しているものでもある（I-S条件）。また、自然・社会環境がスポーツ環境として活用される場合があるように経営的条件と社会的条件も重複している（M-S条件）。また3つの条件が重複することもある（I-S-M条件）。たとえば、スポーツ施設にアクセスするための公共交通等は、経営的条件と分かちがたいものであるが、経営体が能動的に改変することは難しい社会的条件とも言える。また、運

動生活者によって公共交通の利便性への意味づけが異なったり、それに伴って施設へのアクセシビリティが異なって意味づけられたりする場合、主体的条件とも言える。

そこで、本研究では促進条件、抵抗条件の低位条件としての主体的条件、社会的条件、経営的条件を以下の通り定義し、調査対象者の語りを解釈する際の枠組みを提示する。

(1) 主体的条件

運動生活者の身体的・心理的状况に加えて、自然・社会環境やスポーツ事業やその運営に関する主観的認知と定義する。

これまで、主体的条件は運動者の心身の健康状態や運動に対する欲求や必要感、自己効力感などを含む心理状態、運動・スポーツそのものへの興味・関心、イメージと理解されてきた（八代・中村，2002）。本研究では、これらに加えて、運動生活者の意味世界としてのスポーツ環境や

自然・社会環境を含める。すなわち、事実としてではなく運動生活者によって意味づけられた社会的条件や経営的条件を主体的条件に含めるものである。

(2) 社会的条件

運動生活者の主観的認知に依存しない、事実としてのスポーツ環境以外の自然・社会環境と定義する。

これまで、社会的条件はスポーツ環境以外の自然・社会環境と理解されてきた(八代・中村, 2002)。しかし、これらの自然・社会環境は生活者によって意味づけられる対象でもある。本研究では運動生活者によって意味づけられた自然・社会環境を主体的条件に含むように操作化したため、事実としての自然・社会環境のみを社会的条件とする。また、自然・社会環境はスポーツ事業によってスポーツ環境としてそのま

ま利活用される場合があるが、それはスポーツ事業の結果であり、経営的条件に含めるものとする。

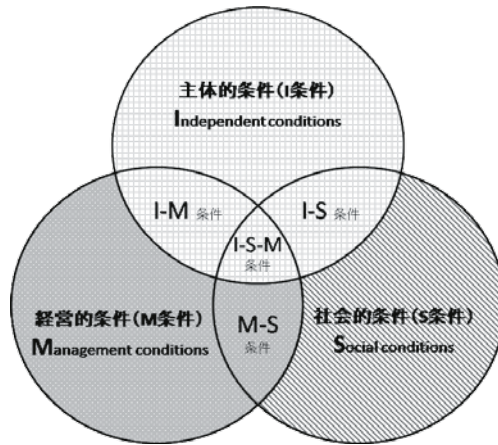
(3) 経営的条件

運動生活者の主観的認知に依存しない、事実としての既存のスポーツ環境と定義する。

経営的条件はスポーツ事業やその運営に起因する条件と理解されてきた(八代・中村, 2002)。しかし、それらは生活者によって意味づけられる対象も含んでおり、本研究では運動生活者によって意味づけられた事業と運営を主体的条件に含めて操作化している。そのため、本研究における経営的条件は事実として語られたもののみとする。

このように定義した上で、各条件を図2のように操作的に切り分ける。

図2 本研究における主体的条件, 社会的条件, 経営的条件の操作的分類



Ⅲ. 結果

1. 事例1のライフストーリー

小学校期はスポーツ少年団や施設等がないため、家周辺で遊ぶことが多かった。スポーツに対する情報が少なく、運動・スポーツに対する興味・関心は低かった。中学校期は卓球部に入部した。しかし、退部し、通学が同じ友人からの誘いによりテニス部に入部した。高等学校で

は運動・スポーツ実践はない。社会人になり、職場の野球チームに所属した。チームは仕事の延長上のようなもので、ほとんど強制的に入ることになったという。30歳を過ぎて野球を辞めた。その後、空手を1年間行い、娘と数回サッカー観戦に行ったものの、特に運動やスポーツをしようとは思っていなかったという。その後、10年ほど運動・スポーツをしていない。40歳を過ぎた頃から人間ドックの結果が悪化しており、

医者から運動の勧めがあり、運動・スポーツへの意欲は高まっていたが、きっかけがなく行動に移すことはなかった。市町村合併を契機に転勤があり、仕事に余裕ができるようになった。

昼休みの時間に散歩する機会があり、ウォーキングを行うようになった。同時期に職場からトレーニングジムの無料券の配布があり、当該ジムが通勤途中にあったことから定期的に通うようになった。その後の転勤によって通勤途中でジムへ通うことができなくなったが、仕事終わりに職場周辺のランニングを行うようになった。また、通勤手段が車から自転車へ変わり、1年間ほど、通勤と仕事終わりの運動を継続した後、ロードバイクを購入し、通勤と休日に走るようになった。再度転勤があり、自転車での通勤は不可能になり、ロードバイクに乗る頻度も減っていった。また、仕事が忙しくなったこともあり、運動の実施が不定期になっていった。

そして、ヘルニアで入院することになったことから数ヶ月運動ができなくなった。数か月後、リハビリを兼ねて昼休みに職場の階段昇降運動を開始し始めた。

2. 事例2のライフストーリー

中学校期までは、近所の子どもたちで集まり通学し、遊んでいた。中学に入りバレーボール部に入部した。しかし、上下関係が厳しく、高校では部活動に加入しなかった。その後、友人の誘いからソフトボール部に入った。短期大学に入学後、部活動には入らなかったものの、知人の誘いからママさんバレーの練習相手をするようになった。また、友人の誘いから青年団に参加した。社会人になってからも、高校時代からの友人とともにママさんバレークラブと青年団に参加し続けた。ママさんバレークラブ、青年団以外にも職場の人とのつながりでソフトテニスやヨガを行っていた。結婚によって居住地域が変わり、それまで参加していた運動・スポーツ活動に参加しなくなった。その後、しばらく運動・スポーツ活動を行っていなかったが、地域の運動会に参加した際に、当該地域のママさんバレークラブに誘われ、再び参加するように

なった。しかし、参加直後に妊娠したことからママさんバレークラブの練習に行かなくなった。近所の住民から別のママさんバレークラブの誘いはあったものの子育て期間中は参加しなかった。子育てが落ち着いた頃から、再びママさんバレークラブに参加し始めた。子どもたちがスポーツ団体に所属してからは、家族全員が各々のスポーツ活動のスケジュールに合わせて生活するようになっていった。その後は、バレーボールを継続しながらウォーキングやエアロビクスを行ったり、青年団における様々な種類の運動やスポーツ活動に参加したりしていた。40歳半ばになり、膝の調子が悪くなり、ママさんバレークラブを辞めることになった。リハビリのために治療等に通院しているが、運動は行っていない。知人の情報からウォーキング程度はできることを知り、ウォーキングを行いたいと考えているという。

3. 事例3のライフストーリー

小学校期は、学校までの距離が遠く、近所の広場で野球を中心とした遊びをしていた。中学校期も通学に1時間かかることから、部活動への入部をためらっていたが、友人との関係から陸上部に入部した。高校では野球部に入りたかったが、親の反対により断念し、陸上部に入部したものの、3年生になる年に退部した。社会人になり、職場の野球クラブに所属した。地域リーグ内に同世代が多かったことから、同世代で集まり新たなクラブを作り、全国軟式野球連盟の大会にも出場するようになった。転勤があり、所属クラブが変わってからはメンバー集めに苦労するようになったという。前の職場クラブでも地域リーグに参加していたが、4、5年後には仕事との兼ね合いで参加できなくなった。転勤後の所属チームで大会参加を続けていたが、人数不足で棄権することがあり、人数が揃わず出場することを悩ましく感じるようになったという。40歳手前になり、クラブの参加者は高齢化し、自分自身もプレーすることが辛くなっていった。同時期に国体が開催されることになり、クラブから必ず審判を派遣しなければならなく

なった。その頃にはクラブ自体も人数集めに苦労しておりクラブの継続が厳しい状態であったという。同時期に、子どもが所属するサッカークラブから保護者コーチを任されるようになり、野球クラブの練習や人集めに注力できなくなり、クラブを解散することになった。その結果、スポーツ活動から離れるが、それに伴ってサッカーの指導者として多くの時間を割くようになった。現在では、地域である行事や役割を担いながら、サッカーの指導者を継続している。

IV. 考察

1. 事例1の転機と促進条件・抵抗条件（転機と条件構造の対応関係は表2参照）

(1) 中学校期の運動部入部から退部、転部の転機

この転機は、中学校入学後、卓球部に入部するものの、卓球部を辞める。その後、テニス部へ転部するという期間である。

事例1は、「強豪部が少なく参加しやすかった」(I条件：主体的条件)ことと「文化部がない」(M条件：経営的条件)ということ運動部入部の促進条件としていた。その上で、「運動部の種類が多かったこと」(M条件：経営的条件)と、卓球が「簡単そうな競技」(I条件：主体的条件)と認識していたことにより卓球部に入部した。しかし、部活動を通して、「同級生と力の差がある」ことと「上手くできない」(いずれもI条件：主体的条件)という思いが強くなってきたため、卓球部を辞めた。同時期に登下校を同じくする「友人の誘い」(S条件：社会的条件)が基盤となり、テニス部の「同級生との力の差がなかった」「雰囲気わきあいあい」(I-M条件：主体的条件^{註3})という認識が加わり、テニス部に転部した。

(2) 高校運動部非加入の転機

この転機は、高校入学後、運動部非加入となるという期間である。

高校では文化部に入部した。運動・スポーツが「不得意」「好きではない」「高校の運動部活動は、競技が上手い人が続けたところ」(いずれもI条件：主体的条件)という認識が抵抗条件の基盤をなしており、これに「周囲の友人も運動部に入らなかった」「(中学校の)同級生とばらばらになる」(いずれもS条件：社会的条件)ということが加わり、運動部に加入しなかった。

(3) 社会人時代のクラブ所属から退部への転機

この転機は、高校卒業後に会社に入社し、職場の野球クラブに所属する転機から30歳を境に野球クラブを辞めるという期間である。

社会人になり、職場の野球クラブに半強制的に所属した。野球が「上手くない」ことから、「ほとんど補欠」(いずれもI条件：主体的条件)であることを抵抗条件と意味づけており、年齢を重ねてからも、クラブに、「新たに加える人がいる」(S条件：社会的条件)ため、補欠であることが多かった。しかし、週4,5回の仕事後の練習や野球クラブへの所属を「仕事の延長」(S条件：社会的条件)と認識していたことに加えて、自身が行わなければならない練習道具の準備や飲み会の設定などの「クラブの世話」(I-M条件：主体的条件^{註4})によってクラブの雰囲気が「わきあいあい」(I-M条件：主体的条件)なものになっていたため、野球を継続していた。

その後、クラブメンバーが「30歳を境に辞めていた」(M-S条件：経営的条件^{註5})ことから、前記の抵抗条件が相対的に強まり、自らも30歳を境に野球クラブを辞めた。

(4) 社会人時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機

この転機は、仕事が忙しく継続的に運動・スポーツを実施していなかった時期から、転勤をきっかけに散歩やジムを利用するという期間である。

野球クラブ退部後、継続的に運動・スポーツ実施をしていなかった事例1は、その抵抗条件について、運動・スポーツに「興味がない」「意

欲がない」(I条件：主体的条件)ということに加えて、会社の役員になったため「出張が増え」「仕事が忙しく」(いずれもS条件：社会的条件)、休みの日は「ゆっくりしたい」「時間がない」(いずれもI条件：主体的条件)ということがあったと語った。その後、40歳頃の「健康診断の数値が悪かった」(I条件：主体的条件)ことをきっかけに、運動・スポーツに「興味が出る」(I条件：主体的条件)ことを促進条件と意味づけていたが、「きっかけがない」(I-M条件：主体的条件^{注6})ことが相対的に強かったため、運動・スポーツの実施には至らなかった。

その後、市町村合併による転勤から職場の職員が増え、「仕事に余裕ができた」(S条件：社会的条件)ことが前記の促進条件「健康診断の数値が悪かった」に重複したことで、運動・スポーツをする「時間がある」「興味があった」(I条件：主体的条件)という促進条件が、前出の「きっかけがない」という抵抗条件に対して相対的に強くなった。これらが基盤となり、昼休みに「時間がある」「気晴らし」(I条件：主体的条件)という促進条件が加わったことで、「職場の近くに1周したら2km程の道があることを見つけた」(I-S-M条件：主体的条件^{注7})ことから自ら散歩するようになった。

事例1は、散歩をするようになった同時期に、促進条件の基盤として職場からの「ジムの無料券の配布」(M条件：経営的条件)があり、転勤によって「通勤途中の体育館にジムがある」(M-S条件：経営的条件^{注8})ということが加わり、「時間がある」「運動したい」(I条件：主体的条件)という欲求が重複したことでジムを利用するようになった。

(5) 社会人時代の転勤による転機

この転機は、転勤によってジム利用を中止するが、職場周辺環境にて運動を再開し、運動としての自転車通勤を始める。その後、再度転勤によって、運動実施の頻度が減っていくが、昼休みを利用して運動を継続するという期間である。

再びの転勤によって、これまで利用していた

「ジムへのアクセスが悪くなった」(S条件：社会的条件)ことからジム利用を中止した。また、昼休みの散歩やランニングも止めた。しかし、「運動したい」「楽しい」(I条件：主体的条件)という思いは維持され、この促進条件を基盤にして、職場周辺の道路や空きスペースを「運動できる場所」(I-S-M条件：主体的条件^{注9})として意味づけることで運動を再開した。その後、職場のノーマイカーデーの取り組みから「通勤距離が4.5キロ」(S条件：社会的条件)であったため、「中学生が通学している距離」「自転車通勤できる」(I条件：主体的条件)という認識が加わり、運動としての自転車通勤を始めた。

その後、再度転勤することとなり、「通勤距離が遠くなった」(S条件：社会的条件)ことで自転車通勤を止めた。また「仕事が忙しい」(S条件：社会的条件)ことを抵抗条件として意味づけ、運動・スポーツ実施頻度が減ったと意味づけていた。しかし、「身体を動かしたい」「ちょっとした時間を利用したい」(I条件：主体的条件)という思いを促進条件の基盤として、昼休みに「時間がある」(I条件：主体的条件)「空きスペースがある」(I-S-M条件：主体的条件^{注9})ことが加わったことで、筋力トレーニングや階段昇降といった運動を継続していた。

(6) 社会人時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機

この転機は、ヘルニアになった後の運動非実施期間から運動実施となる期間である。

事例1は、「ヘルニアになった」(I条件：主体的条件)ことで運動の一時中断を余儀なくされる。療養中も「運動したい」(I条件：主体的条件)という思いは維持されていたものの、回復後に運動・スポーツ実施する「きっかけがない」(I-M条件：主体的条件^{注10})ことや「仕事が忙しい」(S条件：社会的条件)ことが重複し、運動再開には至らなかった。ヘルニアから回復したのち、「体力低下を感じた」(I条件：主体的条件)ことが基盤となり、「運動したい」「リハビリしたい」(I条件：主体的条件)という思いが強くなり、「自分の好きな時に運動したい」

(I条件：主体的条件) という思いが加わったことで、「昼休みは運動・スポーツができる時間」(I-S-M条件：主体的条件^{注11}) と自ら意味づけ、ストレッチや階段昇降を行うようになった。

表2 事例1の運動者行動の生起条件

ライフストーリー	運動者行動	促進条件	抵抗条件
中学校入学	卓球部入部	強豪部が少なく参加しやすかった(I) 文化部がない(M) 運動部の種類が多い(M) 簡単な競技(I)	
	卓球部退部		同級生と力の差がある(I) 上手くできない(I)
	テニス部転部	友人の誘い(S) 同級生と力の差がなかった(I-M) 雰囲気わきあいあい(I-M)	
高校入学	運動部非加入		運動・スポーツが不得意、好きではない(I) 高校の運動部活動は、競技が上手い人が続けたところ(I) 周囲の友人も運動部に入らない(S) 中学校の同級生とばらばらになる(S)
会社に入社	野球クラブ加入	仕事の延長(S) クラブの世話(I-M) わきあいあい(I-M)	野球が上手くない(I) ほとんど補欠(I) 新たに加入する人がいる(S)
30歳	野球を辞める		30歳を境に辞めていた(M-S) 運動・スポーツに興味、意欲がない(I) 出張が増え、仕事が忙しい(S) 休みの日はゆっくりしたい(I) 時間がない(I)
健康診断の数値悪化		健康診断の数値が悪かった(I) 運動・スポーツに興味が出る(I)	きっかけがない(I-M)
	転勤	仕事に余裕ができた(S) 時間がある(I) 運動・スポーツに興味があった(I) 昼休みに時間がある(I) 気晴らし(I) 職場の近くに散歩に適した道を見つけた(I-S-M)	
	ジム利用開始	ジムの無料券の配布(M) 通勤途中の体育館にジムがある(M-S) 時間がある(I) 運動したい(I)	
	再度の転勤	ジム利用中止	ジムへのアクセスが悪くなった(S)
	職場周辺での運動	運動したい(I) 楽しい(I) 職場周辺の道や空きスペースを運動できる場所(I-S-M)	
	自転車通勤開始	通勤距離が4,5キロ(S) 中学生が通学している距離(I) 自転車通勤できる(I)	
	再度の転勤	自転車通勤停止 運動実施頻度減少	通勤距離が遠くなった(S) 仕事が忙しい(S)
	昼休みの運動実施	身体を動かしたい(I) ちょっとした時間を利用したい(I) 時間がある(I) 空きスペースがある(I-S-M)	
ヘルニア	運動非実施	運動したい(I)	ヘルニアになった(I) きっかけがない(I-M) 仕事が忙しい(S)
再度の転勤	昼休みの運動再開	体力低下を感じた(I) 運動したい(I) リハビリしたい(I) 自分の好きな時に運動したい(I) 昼休みは運動・スポーツができる時間(I-S-M)	

2. 事例2の転機と促進条件・抵抗条件（転機と条件構造の対応関係は表3参照）

（1）中学校運動部入部の転機

この転機は、中学校に入学し、バレー部に入部するという期間である。

事例2は、中学校に入学し、「背が高い」（I条件：主体的条件）という自己認識に、「バレー漫画が流行していたこと」「友達の影響」（S条件：社会的条件）が重複したことでバレー部入部に至った。

（2）高校運動部非加入の転機

この転機は、高校では中学時代の経験から運動部に入部しないという期間である。

高校進学後は、バレー部の顧問や先輩からの「入部の誘い」（S条件：社会的条件）という促進条件があったものの、中学での部活動の経験から「上下関係が厳しい」「先輩が怖い」（I-M条件：主体的条件^{注12}）ということが加入に対する抵抗条件の基盤をなしていた。この抵抗条件に加えて、「（高校は）勉強するイメージ」「学校生活に慣れない」（I条件：主体的条件）ということと、部活動は「中学で一区切り」（I条件：主体的条件）という認識と、「バレー部のレベルが高い」（M条件：経営的条件）ということ、そして「友達も加入しない」（S条件：社会的条件）ことが重複したことで運動部に加入しなかったと意味づけていた。

（3）高校時代のバレー部非加入からソフトボール部入部への転機

この転機は、運動部非加入である時期からソフトボール部へ入部するという期間である。

高校入学後、バレー部に入部しなかった事例2だったが、運動・スポーツが「得意」「好き」（I条件：主体的条件）という認識は維持されていた。そのため、マネージャーである「友達に誘われた」（S条件：社会的条件）ことと部活動が「楽しそう」（I-M条件：主体的条件）と感じたことを促進条件としてソフトボール部に入部した。その際、入部しなかった場合に「友達

と遊ぶためにお金がかかる」（S条件：社会的条件）ことや「身体を動かしたい」（I条件：主体的条件）ということも重複的に加わったことで、ソフトボール部への入部に至ったと意味づけていた。

（4）短大時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機

この転機は、高校卒業後、短期大学入学するも運動・スポーツ非実施であった。知り合いに誘われ、ママさんバレークラブに参加するという期間である。

短期大学に入学後は、在学期間が2年間であることや実習等があることから「時間がない」（I条件：主体的条件）と感じていたことや、サークル等の「雰囲気良くない」（I-M条件：主体的条件）ことが重複し、サークル等に加入しなかった。しかし、近隣住民のママさんバレークラブメンバーの「知り合いに誘われた」ことや高校からの同級生と一緒に参加する「友人の影響」（いずれもS条件：社会的条件）によって、ママさんバレークラブに参加することに至ったと意味づけていた。

（5）結婚後の運動・スポーツ非実施から実施への転機

この転機は、結婚後に運動・スポーツ非実施であったが、地域のつながりや夫の勧めからママさんバレークラブに参加するという期間である。

事例2は、「結婚」に伴って「生活の変化」と「居住環境の変化」（S条件：社会的条件）に伴う「スポーツ環境の変化」（M-S条件：経営的条件^{注13}）が重複したため、ママさんバレークラブを含め、その他の活動を辞めたという意味づけていた。

その後、「地域の運動会の開催」（M条件：経営的条件）をきっかけにして「地域のつながり」（S条件：社会的条件）や「身体を動かしたい」「体重の増加」（いずれもI条件：主体的条件）が重複的に促進条件として加わったことで、移住先のママさんバレークラブへの入会を

検討し始めた。さらに、ママさんバレークラブ参加を「夫に勧められた」(S条件:社会的条件)ことが参加を決定づけたと意味づけていた。

(6) 子育て期以降の運動・スポーツ非実施から実施への転機

この転機は、妊娠、子育てを理由に運動・スポーツ非実施であった期間から、ママさんバレークラブに参加するという期間である。

事例2は「妊娠」「子育て」(I条件:主体的条件)に伴う「仕事への影響」(S条件:社会的条件)が抵抗条件として重複したことでママさんバレークラブを辞めた。

しかし、「母親同士のつながりは切れなかった」(S条件:社会的条件)ことが促進条件の基盤として維持され、その後、ママさんバレークラブの「情報提供があった」ことやクラブに「仲間がいる」(いずれもM条件:経営的条件)こと、そして「家族の協力」(S条件:社会的条件)が重なったことでクラブ復帰した。

(7) その後の運動・スポーツ実施から運動・スポーツ非実施への転機

この転機は、ケガを抱えながらもママさんバレークラブを継続していたが、ケガの悪化により、ママさんバレークラブを辞めるという期間である。

事例2は、ママさんバレークラブを継続する中で、「膝の状態が良くない」(I条件:主体的条件)ことを抵抗条件の基盤として意味づけていた。しかし同時に、ケガに対する「ケアの情報交換」(M条件:経営的条件)があったことと「母親同士のつながり」(S条件:社会的条件)が強かったため、クラブでの活動を継続していた。その後、「膝の状態がさらに悪化」(I条件:主体的条件)したことから「仕事への影響」「生活への影響」(S条件:社会的条件)が抵抗条件として強まり、その結果、クラブを辞めたと意味づけていた。

表3 事例2の運動者行動の生起条件

ライフストーリー	運動者行動	促進条件	抵抗条件
中学校入学	バレー部入部 ↑↓	背が高い(I) バレー漫画が流行していた(S) 友達の影響(S)	
高校入学	運動部非加入	入部の誘い(S)	上下関係が厳しい(I-M) 先輩が怖い(I-M) 高校は勉強するイメージ(I) 学校生活に慣れない(I) 部活動は中学で一区切り(I) バレー部のレベルが高い(M) 友達も加入しない(S)
	ソフトボール部入部 ↑↓	運動・スポーツが得意、好き(I) マネージャーである友達に誘われる(S) 部活動が楽しそう(I-M) 友達と遊ぶためにお金がかかる(S) 身体を動かしたい(I)	
短大入学			時間がない(I) サークルの雰囲気良くない(I-M)
	ママさんバレー加入 ↑↓	知り合いに誘われた(S) 友人の影響(S)	
結婚			結婚(S) 生活の変化(S) 居住環境の変化(S) スポーツ環境の変化(M-S)

	地域の運動会参加	地域の運動会の開催(M)	
	ママさんバレークラブ参加	地域のつながり(S) 身体を動かしたい(I) 体重の増加(I) 夫に勧められた(S)	
妊娠	ママさんバレークラブを辞める		妊娠(I) 子育て(I) 仕事への影響(S)
	ママさんバレークラブ復帰	母親同士のつながりは切れなかった(S) ママさんバレークラブの情報提供がある(M) 仲間がいる(M) 家族の協力(S)	
膝のケガ	ママさんバレークラブ継続	ケアの情報交換(M) 母親同士のつながり(S)	膝の状態が良くない(I)
	ママさんバレークラブを辞める		膝の状態がさらに悪化(I) 仕事への影響(S) 生活への影響(S)

3. 事例3の転機と促進条件・抵抗条件（転機と条件構造の対応関係は表4参照）

(1) 中学校期の運動部非加入から入部への転機

この転機は、中学入学後、すぐには部活動に入部しなかったが、転校生がきっかけとなり、陸上部に入部するという期間である。

事例3は、中学校入学後、「学校まで遠い」(S条件:社会的条件)ことや「親が心配する」「早急に学校生活に慣れたい」(I条件:主体的条件)ということが抵抗条件として重複したことで、運動部に入部しなかったと意味づけていた。その後、スポーツ少年団等がなかったために「行いたい運動・スポーツがなかった」(I-M条件:主体的条件^{注14})ことや「親の影響」(S条件:社会的条件)が重複し、「入る時期を逸した」(I条件:主体的条件)という思いが強くなり、運動部やクラブに加入することはなかった。しかし、その後「転校生が部活に入った」(S条件:社会的条件)ことと「何かの部活動に入りたい」(I条件:主体的条件)という思いが重複したことで、陸上部入部に至ったと意味づけていた。

(2) 高校期の運動部入部から退部への転機

この転機は、高校入学後、陸上部に入部するものの、継続せず、陸上部を退部するという期間である。

事例3は、高校入学後、「中学の経験」(I条件:

主体的条件)と「陸上用具が揃っていた」(M条件:経営的条件)ことから陸上部に入部した。しかし、陸上部入部以降は「野球がしたい」(I条件:主体的条件)という思いが陸上継続の抵抗条件の基盤となり、「陸上に飽きた」(I条件:主体的条件)ことに加えて、「(部活を辞めると言っていた)友人の影響」(S条件:社会的条件)が重複したことで、部活動の練習に参加しなくなったと意味づけていた。その後、「顧問の影響」「友人の影響」(S条件:社会的条件)から部活を辞めたという。

(3) 社会人時代の野球クラブ入部の転機

この転機は、会社に入社し職場の野球クラブに所属したという期間である。

社会人になり、「野球がしたい」(I条件:主体的条件)という思いが促進条件の基盤となり、職場に「野球クラブがある」(M条件:経営的条件)ことと、同僚に「野球クラブに誘われた」(S条件:社会的条件)ことが重複して加わったことで、野球クラブに参加したと意味づけていた。

(4) 社会人時代の野球クラブ継続から脱退・解散の転機

この転機は、転勤先の野球クラブをメンバーの高齢化がありながらも継続していたが、のちに野球クラブを解散し、野球を辞めるという期

間である。

事例3は転勤があったが、転勤先の野球クラブに加入した。転機前の野球クラブを数年継続していたが、仕事との兼ね合いから止めた。転勤後の所属クラブでは、「人数が集まりにくい」(S条件：社会的条件)ことや「メンバーの高齢化」(S条件：社会的条件)、そして「出場しなくても試合の審判を派遣しなければならない」(M条件：経営的条件)ことを、クラブの活動継続に対する抵抗条件として保持していた。

しかし、「野球がしたい」(I条件:主体的条件)という思いが抵抗条件に対して相対的に強かったため野球クラブの活動を継続していた。その後、息子が所属するサッカークラブの「試合の審判を頼まれた」ことと「前任の保護者コーチの人が辞めた」(いずれもS条件：社会的条件)ことが抵抗条件として生じ、さらに「わが子の少年団のコーチを任された」(I条件：主体的条件)ことが抵抗条件として重複的に加わり、以前から「ケガを抱えていた」(I条件：主体的条

件)という抵抗条件が相対的に強くなった。さらに「野球の審判を2人派遣しなければならなくなった」(M条件：経営的条件)ことから抵抗条件の影響力が強まり、野球を辞め、クラブも解散したと意味づけている。

V. 結論

本研究を通して、運動生活の転機に含まれていた運動者行動の促進条件あるいは抵抗条件としての主体的条件、社会的条件、経営的条件をライフストーリーから理解することで、3つの条件は運動生活者の意味世界においては重複するものであることが明らかになった。これまでの体育・スポーツ経営学的認識において、経営的条件は経営的範囲内にあるものとして捉え、主体的条件と社会的条件は経営体が直接関与しづらいと認識されてきた。しかし、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件や経営

表4 事例3の運動者行動の生起条件

ライフストーリー	運動者行動	促進条件	抵抗条件
中学校入学	部活動非加入		学校まで遠い(S) 親が心配する(I) 早急に学校生活に慣れたい(I) 行いたい運動・スポーツがなかった(I-M) 親の影響(S) 入る時期を逸した(I)
	運動部加入	転校生が部活に入った(S) 何かの部活動に入りたい(I)	
高校入学	陸上部入部	中学の経験(I) 陸上用具が揃っていた(M)	
	練習に参加しなくなる		野球がしたい(I) 陸上に飽きた(I) 友人の影響(S)
	陸上部退部		顧問の影響(S)
会社に入社	野球クラブ参加	野球がしたい(I) 野球クラブがある(M) 野球クラブに誘われた(S)	
転勤	転勤先の野球クラブに加入	野球がしたい(I)	人数が集まりにくい(S) メンバーの高齢化(S) 出場しなくても試合の審判を派遣しなければならない(M)
	野球クラブ解散、野球を辞める		サッカークラブの試合の審判を頼まる(S) 前任の保護者コーチの人が辞めた(S) わが子の少年団のコーチを任された(I) ケガを抱えていた(I) 野球の審判を2人派遣しなければならなくなった(M)

的條件と社会的條件の重複領域であるM-S条件のように、経営的條件は主体的條件と社会的條件と相互重複しているということが確認された。

これは運動生活者の意味世界において、意識的にしろ、無意識的にしろ、主体的條件と社会的條件と経営的條件の3つの條件が複雑に絡み合っており、運動者行動の生起に向けて促進條件または抵抗條件として意味づけられていると考えられる。本研究にて明らかになった運動者行動の生起條件の状況を概観すると、これまで経営的條件と考えられるような条件の中にも、運動生活者の捉え方に依存する部分が多い重複領域の條件がみられるだろう。さらに、事例として取り上げた運動生活者の意味世界においては、ひとつの促進條件により新たな促進條件を意味づける、促進條件と抵抗條件が拮抗関係の中で運動者行動の生起する状況が確認された。

まず、ひとつの促進條件により新たな促進條件を意味づけるという状況は、事例1のライフストーリー（社会人時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機、社会人時代の転勤による転機、社会人時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機）や事例2のライフストーリー（結婚後の運動・スポーツ非実施から実施への転機）において確認された。事例2では、結婚に伴って生活環境やスポーツ環境の変化から運動非実施であったが、地域の運動会という経営的條件が提供されたことにより、それに呼応して運動会に参加した。この経営的條件がきっかけとなり、地域のつながりが生まれ、人からの誘いという社会的條件や運動欲求の高まりという主体的條件が意味づけられている。このように経営的営為によって、運動・スポーツ環境や運動生活者の主体性が意味世界においては変容することを示している。また、事例1において、促進條件としての主体的條件が基盤として保持されているとき、経営的條件が整っていないくとも、自ら身近なスペースを運動の場（I-S-M条件）とみなして運動実施に至ることが確認されたことには注目すべきだろう。事例1は、転勤に伴って利用していたジムへのアクセスが悪くなり運動から離脱せざるを得なかった。しかし、「運

動したい」という主体的條件が維持されていたため、社会的條件としての職場周辺の道路や空きスペースを、自らの主体的認知によって経営的條件として意味付与し、周辺環境を運動の場（I-S-M条件）として主体的に意味づけて運動を継続した。運動欲求は、生活環境を運動・スポーツ環境として意味づけることを促し、運動・スポーツと関わるための条件を見出す主体性の源泉になりうるのである。これは、清水（2001）が、スポーツ生活の類型にて、自給自足的なスポーツ生活様式として整理しているI型に当てはまる事象である。本研究を通して、生活者による自給自足的な運動生活が生起している姿が実証されたと言えるだろう。またこれは、有限の運動・スポーツ環境を活かし、他者からのサービス供給に依存しない持続可能な運動生活である。

そのためのマネジメント方策は、運動行動を生起させるための外部的・直接的な条件整備ではなく、運動生活者自らの運動欲求により、運動・スポーツ生活とその充実のさせ方に関する認識を再構築することを促すことかもしれない。

運動生活者の運動・スポーツ生活への意味づけの変容を促すための具体的なマネジメント方策を立案することは、現状の筆者らの力量を超えており今後の研究課題としたいが、そのようなマネジメントは、運動・スポーツ生活の自給自足的充実化の限界に直面したときに必然的に生じる他者との協働の要請に対して必要不可欠なものだろう。このことは、清水（2001）によるスポーツ生活者協同組織化のためのマネジメントと同義と考える。

次に、全ての事例にて確認された促進條件と抵抗條件が拮抗関係の中で運動者行動が決定づけられるという状況に注目すべきだろう。事例1（社会人時代のクラブ所属から退部への転機、社会人時代の運動・スポーツ非実施から実施への転機、社会人時代の運動・スポーツ実施から非実施への転機、社会人時代の転勤による転機）や事例2（高校運動部非加入の転機、その後の運動・スポーツ実施から運動・スポーツ非実施への転機）、事例3（社会人時代の野球クラブ入部の転機、社会人時代の野球クラブ継続から

脱退・解散の転機)では、抵抗条件を抱えていながらも、それを促進条件が上回る、または、促進条件を抵抗条件が上回るにより運動実施／非実施へと至る情況が把握された。これまでスポーツ事業は運動生活者と運動・スポーツを結びつけるための条件整備の営みであり、抵抗条件を取り除くことと促進条件を助長することが必要と考えられてきた。このことは正当だが、運動生活者の意味世界では、抵抗条件と促進条件は並存するのであり、その相対的強弱によって運動者行動が決まると理解することができる。そのためのマネジメント方策の立案も今後の実践的知見の集積を待ちたいが、生活者の運動者行動の決定構造が複雑で多様であり、個別的な意味の世界であることを踏まえれば、平均化される<運動生活者>は実在しないのであり、個別の意味世界をもつひとりの運動生活者に寄り添うマーケティングが求められるだろう。

これまでのスポーツ事業を事業主体としての経営体が運動生活者をマスの的に捉え、生活文脈の個別性・固有性を捨象しているという意味で「上からのスポーツ事業」と表現すれば、運動生活者の意味世界から促進条件や抵抗条件を捉え直し、生活者が意味付与した運動・スポーツ環境やスポーツサービスを、生活者自らが意味づけし直すことを促すスポーツ事業を「下からのスポーツ事業」と呼べるのではないだろうか。

このことは、清水(2001)の指摘するところの「スポーツ欲求や必要そのものが財の生活過程とともに創られ、さらに欲求の充足は全て他者によって賄われるという状況」(清水, 2001, p.24)を避け、スポーツ経営がスポーツ生活財を供給するだけでなく、「どんなスポーツ生活者の生産につながるかを展望」(清水, 2001, p.21)しながら、スポーツ生活者の生活過程への自覚的・主体的関与としての意味付与のプロセスに介入していくスポーツ事業の構想に他ならない。生活者の意味世界を理解し、介入し、変容させるスポーツ事業は、スポーツ教育的営為としての文化づくり・社会づくりと言えよう。

ここに、生活者の文脈に寄り添い、変容させる新たな地域スポーツ振興が見出せるのではな

いだろうか。

なお、本研究はライフストーリーの一時期としての転機にのみ着目し、そこに内在した促進条件と抵抗条件を理解した。そのため、ライフストーリー全体の流れの中で各条件の相互関係を理解するには至っていない。例えば、学校運動部活動で培われたスポーツ観や運動習慣、スポーツ障害、社会関係等が、その後の人生の運動生活に影響を与えているのであろう様相は把握できていない。運動生活者の潜在意識にある促進条件や抵抗条件は語ることが困難と思われるが、運動生活を理解する上で重要な課題であろう。運動生活研究の調査手法の開発が求められるところである。

謝辞

本研究において、長時間に及ぶ複数回のインタビューに応じていただいた3名の方のご協力に心より感謝いたします。

注

注1) 後藤(2010)は、スポーツライフの変容過程において、時代効果、コーホート効果に加え、年齢効果、地域効果、生活効果といった社会的要因が重層的に影響し合っているだけでなく、ライフヒストリーを用いた分析から同様の時代や地域に生きながらもそれぞれ異なった道筋を歩んでいると指摘している。

注2) ライフストーリー研究法において、ナラティブ・アプローチに分類されるものが、桜井の対話的構築主義アプローチである。インタビューの場で、対象者と調査者の両方の関心から協同で言語化・明示化させることで、彼/彼女らの意味世界を理解しようと試みる方法として考えられている。

注3) 事例1は、テニス部がもっていた卓球部とは異なる特性が、事例1自身の望みと合致したことが転部の理由と解釈され

- たため、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件と認識した。
- 注4) 事例1にとって野球クラブは仕事の延長として関わらなければならないものだったが、それがクラブの雰囲気をよくしており、所属の義務感に対してクラブの楽しさにひかれていたと解釈された。そのため、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件と認識した。
- 注5) 事例1は、30歳で退部しなければならないことは当該クラブで概ね共有されていた行為規範だったが、上手なメンバーは選手として残留したり指導役に回ったりすることもあり、退部年齢の根拠についてははっきりと理解していなかった。パフォーマンス低位な事例1は残留することができないと認識したわけだが、そこには、30歳からパフォーマンスは向上しないという社会通念を認識していたこととクラブの内部規範が重複していたと理解し、社会的条件と経営的条件の重複と認識した。
- 注6) 運動・スポーツに興味があると語りつつ、それを自らの意思で実行する気になれなかったことや実行へと至るきっかけに巡り合わなかったと語っていた。「きっかけがあればやっていた」という語りもあったため、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件と認識した。
- 注7) 職場周辺の環境はスポーツサービスとしてのスポーツ環境ではないが、事例1は運動できるスポーツ環境として語っていた。その認識は、仕事状況の変化や運動・スポーツへの関心・意欲の変化をその背景にもっており、事実としての地域環境の認知(社会的条件)に留まるものではない。そのため、主体的条件と社会的条件と経営的条件の重複領域であるI-S-M条件と認識した。
- 注8) 通勤途中にスポーツ施設があったという事例1の認知は、転勤に伴う通勤経路の変化という社会的事実と、通勤路(国道沿い)に利用可能なスポーツ施設が整備されていたという経営的条件の重複によるものであり、M-S条件と認識した。
- 注9) 運動できる場所や空きスペースに対する運動環境としての事例1の認知は、仕事状況の変化や運動欲求をその背景にもっており、職場環境の認知(社会的条件)に留まるものではない。そのため、主体的条件と社会的条件と経営的条件の重複領域であるI-S-M条件と認識した。
- 注10) 「きっかけがない」という語りは前出したものと同様に、興味はあるものの自らの意思で実行する気になれなかったという主体的条件と、実行へと至るきっかけに巡り合わなかったという経営的条件が重複したものと認識した。
- 注11) 昼休みという職場で制度的に用意された空き時間は、事例1の体力不安や運動欲求によって、自分自身にとっての運動機会に読み替えられた。これは社会的条件と主体的条件と経営的条件が重複した促進条件と解釈されると認識した。
- 注12) 運動部活動における先輩－後輩関係は経営的条件としてのクラブ特性だが、事例2にはそのようなクラブに対する嫌悪があった。そのため、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件と認識した。
- 注13) 事例2は、結婚を機に、隣町に移住した生活環境の変化は社会的事実であるが、それに伴うスポーツ環境の変化は、移住先のスポーツ環境によっては乗り越えられる経営的条件とも認識される。そのため、社会的条件と経営的条件の重複領域であるM-S条件と解釈した。
- 注14) 希望のスポーツ少年団がなかったことは当該地域の経営的条件だが、他種目クラブへの加入は気が進まないということが事例3の抵抗感の中心であり、経営的条件と主体的条件の重複領域であるI-M条件と認識した。

文献

有末賢 (2012) 生活宣言—ライフヒストリーの社会学. 慶應義塾大学出版会株式会社
 ダニエル・ベルトー：小林多寿子 (2003) ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ. ミネルヴァ書房
 後藤貴浩 (2010) スポーツライフの差異に関する研究—ライフヒストリー分析を通して—. 研究論文集教育系・文系九州地区国立大学間連携論文集4-1:1-10
 畑攻ほか (1984) 運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要 7:11-19
 永田靖章 (1969) 運動者行動の階層構造に関する体育管理学的研究-1-主体的条件との関係から. 福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学:83-136
 永田靖章 (1970) 運動者行動の階層構造に関する体育管理学的研究-2-環境的条件(特に体育事業)との関係から-1-運動クラブ(部)について. 福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学:79-108
 永田靖章 (1971) 運動者行動の階層構造に関する体育管理学的研究-3-環境的条件(特に体育事業)との関係から-2-運動行事Program Service)について. 福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学:43-88
 永田靖章 (1972) 運動者行動の階層構造に関する体育管理学的研究-4-環境的条件(特に体育事業)との関係から-3-運動施設用具(Area Service)について. 福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学:97-125
 永田靖章 (1973) 運動者の階層構造に関する体育管理学的研究-5-環境的条件(特に体育事業)との関係から-4-地域社会における運動生活について. 福井大学教育学部紀要 第6部 芸術・体育学:29-65.
 永田靖章・市野聖治・川合勇治・岡部育世・森奈緒美 (1986) 地域における運動施設開放の整備・運営に関する基礎的研究—住民の運動者行動を手がかりとして—. 愛知教育大学研究報告35:45-58

永田靖章・築瀬歩・市野聖治 (1989) 学校体育経営におけるプログラムサービスの運営に関する研究—運動者の能力・資質と運動者行動との関係の分析—. 愛知教育大学研究報告 38:53-63
 中野卓・桜井厚 (1995) ライフヒストリーの社会学. 弘文堂
 岡本重夫 (1977) 体育事業—クラブサービスの具体的研究—. 奈良教育大学紀要26(1):131-140
 桜井厚 (2002) インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方. せりか書房
 桜井厚・小林多寿子 (2005) ライフストーリー—インタビュー—質的研究入門. せりか書房
 桜井厚 (2012) ライフストーリー論. 弘文堂
 関根正敏・柳沢和雄・川邊保孝 (2009) 総合型地域スポーツクラブの設立をめぐる正当性の確保と地域生活の歴史に関する研究. 体育・スポーツ経営学研究23:33-47
 清水紀宏 (1997) スポーツ経営学における基本的価値の検討. 体育スポーツ経営学研究13:1-15
 清水紀宏 (2001) スポーツ生活とスポーツ経営体に関する基礎的考察—スポーツ生活経営論序説—. 体育・スポーツ経営学研究16:13-27
 清水紀宏 (2007) 体育・スポーツ経営学の方法論的課題—自己批判から再構築へ—. 体育・スポーツ経営学研究21:3-14
 清水紀宏 (2009) スポーツ組織現象の新たな分析視座—スポーツ経営研究における「応用」—. 体育経営管理論集1:1-7
 高島稔 (1970) 職場における運動生活の分析. 東京女子体育大学紀要 5:40-50
 高島稔 (1972) 職場における運動生活の分析-2-運動生活の構造化の試み. 東京女子体育大学紀要 7:15-23
 高島稔 (1974) 地域社会における運動生活の分析. 東京女子体育大学紀要 9:23-57
 宇土正彦 (1961) 運動生活の階層に関する体育管理学的研究. 東京教育大学体育学部紀要 1:54-73
 山田富秋 (2005) ライフストーリーの社会学.

- 北樹出版
- 山下秋二・多田信彦（1982）影響交換の様相からみた運動者行動分析の試み－地域スポーツクラブの場合－. 福井医科大学一般教育紀要 2:61-75
- 柳沢和雄（2006）鹿島開発をめぐる生活課題とスポーツの組織化に関する研究－地域開発政策からスポーツ政策への変容をめぐる－. 体育・スポーツ経営学研究20:17-29
- 築瀬歩・市野聖治・永田靖章（1988）学校体育経営におけるプログラムサービスの有効性に関する研究－総合運動プログラムをめぐる運動者行動の分析－. 体育・スポーツ経営学研究5（1）:19-29
- 八代勉・宇土正彦・畑攻・柳沢和雄（1981）運動者行動に関する研究－特に、スポーツに対する購買意識の分析を中心にして－. 筑波大学体育科学系紀要 4 :29-39
- 八代勉・宇土正彦・柳沢和雄・木村和彦・武隈晃（1983）経済的要因が運動者行動に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要 6 :47-56
- 八代勉・中村平（2002）体育・スポーツ経営学講義. 大修館書店
- 八代勉（2002）総合型地域スポーツクラブと我が国のスポーツシステム. 日本体育・スポーツ経営学会：テキスト総合型地域スポーツクラブ. 大修館書店
- 米山俊直・小林多寿子（1993）ライフヒストリー研究入門. ミネルヴァ書房
- 吉澤文雄（1982）コミュニティ・スポーツ論－「場」をめぐる諸条件について－. 信州大学教養学部紀要 第一部 人文科学 第二部 視線科学16:165-177